

2021. 7. 14 (水)

遅いコミュニケーションの意義

赤江達也

速さが評価される時代

今月の共通テーマは「コミュニケーション」です。そこで今日は、遅いコミュニケーションの意義について考えてみたいとおもいます。

現代の社会では「コミュニケーション能力」がよく話題になります。「コミュニケーション能力が高い」というのは、どういうことでしょうか。たとえば、面接でそつなく答えられるとか、SNS でなめらかなやりとりできる、といったことが挙げられるかもしれません。

相手の言ったことや書いたことに、すばやく適切な反応を返すこと。それによってやりとりがスムーズにつながっていくこと。そうしたことができる人は「コミュニケーション能力が高い」ということができそうです。

これを「速いコミュニケーション」と呼んでおくことにしましょう。現代社会では、こうした速いコミュニケーションに大きな価値が与えられています。たとえば、みなさんが就職活動をしたり働いたりするときに、速いコミュニケーションへの対応を期待されていることはたしかです。

遅いコミュニケーションとしての読書

ただ、学問や思想といった領域においては、こうした速いコミュニケーションとともに、遅いコミュニケーションが重要な意味ももっています。そもそも読むという営み自体がかなり遅いものです。

とりわけ学術的な書物は、かなり遅いメディアです。いわゆる学術書は、何年もかけて執筆されることも普通です。また、マックス・ウェーバーやエミール・デュルケムといった人びとが書いた百年以上前の本や論文を読むのも、よくあることです。

私は内村鑑三という人が書いたものを読むことが多いのですが、この内村鑑三もウェーバーたちと同じ時代に生きた人物です。

内村鑑三は明治期の不敬事件（一八九一年）で知られています。内村は第一高等中学校の教師だったのですが、天皇がサインした教育勅語に最敬礼をしなかったとして非難され、教師の職を追われます。

その後、内村はつぎつぎと著作を刊行し、著述家として成功をおさめます。そして不敬事件の一〇年後には、キリスト教の伝道者へと転身して「無教会主義」という思想で知られるようになります。

内村の門下には、多くの優秀な弟子たちが

集まりました。その主要なメンバーは一高・帝大（東京帝国大学）のエリート学生でした。内村は一高の教職を追われましたが、約二〇年後には、その同じ学校の学生たちが内村の下に集まるようになります。内村はかれらと親しく交流し、語りあい、大きな感化を与えました。

内村の弟子たちには優秀な人びとが多く、そのなかには、たとえば、戦後に東大総長となった南原繁や矢内原英雄、戦後社会科学を牽引した大塚久雄らがいました。彼らは無教会キリスト者として、内村の信仰と思想を継承していきます。

ところが、内村はエリート学生に囲まれていた時期に、そうした優秀な弟子たちよりも、自分は会ったことのない「読者」の方を信頼する、というふうに語っています。どういことでしょうか。

複数の時間を生きる

内村は次のように「予言」します。自分の弟子たちは、自分が始めたキリスト教の思想や運動を引き継いでくれるかもしれない。けれど、そのなかでは思想の変質や人びとの対立も生じて、いずれなくなるだろう、と。

しかし、自分の思想は、それによって滅びるわけではない、と内村はいいます。

近き将来において、あるいは遠き将来において、余の知らざる人より、あるいはかつて一回も余に接触せしことなき人より、あるいは遠方にありて余の雑誌又

は著述によりて余の福音を知りし者よりして、余の精神、主義および福音を了解してくれるもの現われて、思わざる所にこれを唱え、余の志を継承しかつこれを発展してくれることを確信する。¹⁾

将来、一度も会ったことがない人が、自分の雑誌や著作を読んで、自分の「精神」「主義」「福音」を理解してくれるだろう。そして——ここが重要なのですが——「思わざる所」、予想もしていないところでこれを唱え、自分の志を継承し、発展してくれることを信じている、というわけです。

内村の場合は宗教思想の話なのですが、学問にも似たところがあります。みなさんが卒業論文の準備をするときに、何年も何十年も——ときには何百年も何千年も——前に書かれた本や論文を読むことがあるかもしれません。それは著者との、また他の読者たちとの、非常にゆっくりとしたコミュニケーションなのです。

大学というのは、遅いコミュニケーションとしての読書を学ぶところでもあります。速いコミュニケーションが求められる現代社会のなかで、この遅いコミュニケーションを身につけておくならば、それによって自分の人生の時間を複数の層へと膨らませることができるのです。

このような遅いコミュニケーションもおすすめて、わたしの話を終わりにしたいとおもいます。

(社会学部教授)

1) 赤江達也『紙上の教会』と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、2013年、318～319頁参照。